

目

〔安齋隨筆 後編 四〕眉拂 婦人養草に云、ある老女の手に物がたりしけるは、大内にては、眉はらふと申也、地下にてはつくるといふ、男の眉をば右よりつくるべし、女房は左より作るべしと、又左右の眉は日月にたとへたれば、月のさはり有る時は、東に向つて眉作るべからずといへり、日本にても眉に種々の名あり、鶯眉、顰眉、ミカヅキ、スズレ、霞眉、大形岸立眉、是はおさなき人につくる眉也と、又唐眉、是はいたつて年たけたる人に作る眉也と、あいかまへて、右より作り始べからざるよしへり、鐵漿つくる事も、春の初につくるには、堅牢地神に手向べし、おはぐろとは、公家方より申ならはしたり、是を内裏にては、ふし水と申給ふ、下種つけがねと云ふと、物語に仍て、今こゝに書つく、

〔年々隨筆 一〕女の眉そる事は、黛もて畫んとての事なり、さるははえ際のしどけなき所、色のこきうすき所などありて、わろびたれば、それをそり落して、おもふまゝに畫くなり、今大かたは剃たるまゝにて、かゝむ物ともおもひたらぬは、無沙汰なる事なり、又はぐろめは、色のきはみてきたなげなるをかくさむ料なり、共に女しく物心つきたるおもむきなり、俗にこれを元服といふは、あらぬ事ながら、おとなになりたる意はかよへり、

〔秋苑日涉 三〕婦人剃眉

此方婦人已嫁、剃去眉、以墨畫於額上、其來蓋舊矣、猗覺寮雜記曰、今婦人削去眉、畫以墨、蓋古法也、釋名曰、黛代也、滅去眉毛、以代其處也、

〔倭名類聚抄 耳三 目〕釋名云、目默也、默而内識也、

〔箋注倭名類聚抄 耳二 目〕所引釋形體文、說文、目、人眼、象形、重童子也、

〔伊呂波字類抄 人體 目〕

〔燕石雜志 一〕物の名

目めはものを照らして見るものなれば、明、歟、亦物を見るものなれば、み、歟、めとみと通ず、